大原野千句
附 紹巴獨吟千句

へ 5
1886

へ 5

何路　第一　大原野千句　百

きよしとぞ花さく雲も小塩山

みちみちきえし明がたの雪　納言　若苔

春の水かんがへ経る月に霞晴て　雪叟　三大

永乃をり来の袖ぬれたりけき　紹巴

むらあしの葉分のさよる秋の風　飛鳥井　中納

夕霧ぬるのあつる　花りきせ　昌叱

猿くよ掛る笠尾は露みつゝく　玄哉
咲乏るよふく昨の笠い行　心茶
更ねまいらぬさ笠ろ小夜枕　莫帖
うり弥の菊そむ志ふ本ふき　好去
八作しふ月を入ぬる夏は之て　宗及
茂ぞ本舟うき遠方の山　宗老
一葉の川ふ去ろくあるれて　白
人かり吹や鳴作との飯うも　玄

お経てしも地うき隣の留垣よ　茂
悉ふとするをみしふ声幸　三
草れとるき笑の未残求りや　吐
すゞ柱ろ作を帆よて三本庭奥　中
作りさ北書の階者を吟訓て　巳
夕色の秋なるいりそう　哉
秀や多しさ昼そそ北村峨　茶
帆よりの与北秀ふる山　帖

漕まよふ歌舟此月の波也　云
磯ね城はなひく雲か峠立　仍
雁の群越千潟や霞なりけん　及
志摩遠く御越冬草の床　李
春も又薄き方より紛る帰小　白
冬すみんのうち此山の色のすゑ　巳
永き日も入れの色におとろきて　哉
かつ騒き声て小業の音此友　叱

松明し世の秋はりやかて雨ん　三
年なかれしてつくき玉此縁　無
あき人此装も余所よりたつきて　临
何まきのをねにあつや花しき　云
おおうりをいりくねのこみる袖の紫　中
まとろとあつさ秋や鳴ぬらし　及
くろかても旅のんをなくひそて　李
や行まし海く此こころも細ほり　白

例ならぬ娘もちらしやよめそん　巴
人のすく名枝も花はこれ　三
何それとも身のきき新して仕舞て　仍
うれしやおをおとりおけ葬　示
浮草のなられて水は淀月日　我
あとまくらすし秋の村雨　帖
秀ならす所の下風かき入て　比
楚る發名残しまへ出て有名　中

こひ乞やと待ふ夕もいかならしや　及
いふ名もすきもりやま郎　云
ちまは咲せより花の客數て　巴
いくまうかにの袖はてたちこ地　白
うつ浮く名乃ら闇の棹をはなれて　三
みなとよあらぬ魚ははしほりとを　芝
月んねくも跡ら此月乃くか吹　示
秀は字田比日のかならず他　及

さひしさは此かなしみにあまる秋の霜　芸
人家は更にきゆる露のそら　巴
世の中は我心ぞ友なりけめ　仍
心むきさつきに土も忘れ給ひし　乙
さとハ一旅のものや順ふらん　白
まろつきをみとられけて　峯
一星入るなれも家ハ帰りしく　巴
くれくさうり雲ハあまりけり　示

夜のまふや饒しし上朝此雲なりん　中
音はこれぞともありしこへ沈し　帖
石くる思ひもや活ぬ草臣月に　及
いつまでもあらし田面なりぬらん　休
崩土城も青に堤の秋の水　白
わろまし人つる夜ハすさまし　巴
旅でしも更なききぬ此桐の葉　心
くれぬてぬまハ月のすむなり　帖

わすれても世を去人の残思信　李
色のめおきての門はやまとひ　忠
袖はいさ秋風ふらむ夏衣　巴
むすぶまくらは侘しぬれは夢　武
はしらうく色ねむ〳〵根深そ　甲
夢のうちはとみし雲のむ　心
越ぬるやすゝ渊のまみ伝なりし　三
営来てあふさかのせき　玄

名
袖はなの雪色りてはかへりこて　求
色ふ露あとの出湯蔵なん　李
まみくむ宿とおりふる夢秋は　仍
なくむ鐘はいや月てふきぬ　白
佛はあふ夜半の枕はながしき　お
きろも根もとくむしもり　巴
恋もあるいぬくことは宮仕へ　臨
みちのきいめるを能やまさん　心

涼しめるをすく残して蚊帳あ　及
篭さのおしてむりふやまし　仍
見わひたるきねまよりたる樒衣　李
みちのみ野への誂うつりいや　三
大原や小雲もうつるる草亭に　北
やまのおとを水の七月夜　示

名ウ

巣に梅すも離れ鴨の宿隠　巴
くる作代の被あまさ七　云

寝うしさあらめぬへきる夜絶　仍
うつしみやさいそ不ちる軽　沾
青柳に待し君をとらえむのを　示
あるき国生み草はうらいし　中
胡蝶のふりも夕霧れあつき　白
をれぬらすみや面影とさらん　北

白　九　蒼孝　九　三大　七
紹巴　十一　中将　七　昌叱　十
玄哉　七　心前　九　英怡　八
了云　七　宗仍　八　宗及　七
宗巻　一

何人　才　元二三五

龍弁
中

中川ハ花や志つきむ上郭北雪
うら風を雅吹出るまい本の亭　叱
山のすむ聲へ硯砌よりきこめて　及
夜てるらふりや竹のつむゝ　三
風渡夜下水をとき川岸ア　白
月まくれたるもし北涼しさ　さま

宮ね乃霜消しあすまて　巴
貴宰ち萬地の末は皆飛ん　戈
うかれくもれつる紅葉の木の下に　仍
山寺ちかしさそしらは北野　帖
明けては見も売けし芳隆に　蕪
つるしまするゝ隣との門　雲
業人のたへいつしか絶ぬらん　左笠
枕きかしまきる篠のもみ榎　中
法主さへ源の松たれ枝折て　叱
やよひ風はさいらうすのる寒　支
墨染の夕ハ鐘の哀なり　三
野るよちらきい秋のゆふへさ　白
沼お経は窓のあとしも門押て　李
あへてもうけりる日ねらるへしき　巳
長月乃月もたまらうすまくに　哉
つふふら夢の葉もあさき露　仍

秋風の吹絶ぬ迄は蝶もなくて　帖
切人なんてね小壁のうら語　旅
炭うり比よかりときゆる夕ま暮　去
雪まみてへき雲なれなんね　叱
越乃寺山もろもろの猿さへも　中
水草きよし狗屋をめでん　三
朔日さ次浄免比氷さけ神て　白
ましきれ去ろうき喜比さへ風　李

手しゆる竹のうき壁いまは涙　巴
松くや梅さし錦うかきうち　芥
わうむ玉の来いかくも青い隠　及
宮古比雲有の氣を又去へきさ　仍
けふや花そ光もかいる秋の月　旅
汁そる物の歌引しわひの意　白
房のまま論語の序を身ま去て　李
まさちちとけぬ中ー比衣くて　帖

金ふまして心ところそ名のしられ　三
うきまきに踏ハす家此ころの紫　巴
句ころもすもう丼ことのをぬた諾　吃
住もありしの浦乃わすれた　及
契たき暁月に夢のゆる　巴
西よめきます手袖の契ひの縁　蕉
志をおもふもいとし遠隔の里　去
わか身のむかし夢ふまうさき　吃

ち羅ハく萩咲ましを恚も花　仍
雲路の友さ入あろう山ぬすさ　白
そ雁へもわかぬ霧に衣まて　武
并を流よて露遠の川なき　羨
ほのかなる精霖の金ちゆ流り　孝
なれまこ一ハしの五月雨の空　去
来る吾うら清すかなさむ一筆は　三
きけも元清しぬさいて咲きて　巴

うら宿とハ己井のいミにたへしこもり　仙
雪のやしほちゝ手非ゑまに　柏
牧村に穿む櫻乃るわきて　荷
まきれぬ麦も鳴ほとゝきす　北
月をまつ晨明かへりすむ夜に　仲
名残をしへせぬ草のうき橋　巴
猿蘇乃洞やとこよ海のうえ　白
人は身をもみゆるあるぬまかしさ　仙

名をつぎにまた侍の年ふりて　求
あふさりしめみゆうりつうし　及
三ウ
訪ゆきもおかし衣みさすとへに　李
よそにある永のちへきき浦なみ　仲
とふれよにほかりし松も根は残て　巴
志ほきる葦つむ星が家く　三
すみれなすまわかりいせりゐきはきく　玄
みちをかまへの花もえる海田　白

萱刈まで胡乱な霧の道中て　怡
被よかれたる聲々也山の鳥　仍
旅なれた花にこそ負ふ心なき　及
かるこに駕むかふ毎の暮　介
是非は桜發從よりうきむしるよ　系
枕ぬへたし春秋のゆ程　巴
明はつる月は別来の天津ノ　白
霧にたてたる波のあるけさ　叱

名
聲しなつと時雨し經の山の瀬戸　三
日ならりは露て宿のゆとまち　芝
いつわる眼のうちはおほつる　巴
走らいひさけてこちなる人　及
舟をおきしちらひ出来はほるな　云
お形しもちすき生れいそゐん　系
時つるを聞えぬとても法の庭　叱
この井は聲は稀ぬるまで　怡

更ぬまは顔すゝある灯ゆり　白
わかまゝぬ秋を月いそむかし　三
あすは衣裳切はまうちたへて　さ
ひさしきはと残きみるゝ田　白
中よたりあしの丸やゞ里もなき　蕉
日ともりさびしく寺門鳴　卅
いまわしも出家山人いかなれや　三
人あさきいすゝける世も仏ん左　帖

名ウ

年をまつえん気といひしして　巴
うみのあまゝかゝる趣乃け　仍
きれあくおもね娘るゝ此おかしみ　比
滅のゝある袖のあやるさ　我
作ふとなきをかまへ花のうき　雲
みとりかくあらし松のかちるまと　さる

中務 六　白 九　宗及 七
三大 九　昌叱 八　敬孝 九
紹巴 十一　玄哉 八　宗仍 九
英怡 七　心前 九　了玄 七
右筆 一

何衣　貞三

月花に長家いうの比こそさかりなる　巴
ちまはは桜花下紅しの山　於
長閑なる空もこずゑに吹入て　仍
いつく此雨にこもれゆく雁ん　孝
う久もはなれすは雲の彼此上一　叱
いやとをはるる沖のつりふね　三

見るうちにいく切くる庵の色　中
かさねの菊も御さむき袖　白
ウ
おもはて月にあかるる秋の霜　及
のへいはこも束られのいろ　来
住居をもあらためる垣なるむ　帖
なめく吹に立ちしひきいの口　去
よせ久ろ波の以ろ示鶯動く　文杲
ひろとなすみ陰し立ろきたちゃ　巴

立よひ来ており井る友を露の声　武
表やこりの仙日との舞と　仍
瓜本に新庵もみきうまそ降雪に　李
あをまなれても風の吹しき　吮
電のこほ宮のかけと比伯御山　三
一まちと我らき川水の去恵　中
絶田よりきひ發し折跡里　白
それ筆の分をき簽比ま　及

根負てる木や寒の[illegible]比　虫まて　茶
夕日さびしき竹ち乃わき　帆
冷しき荒れは鐘の声　雲
よもすがらひのねぶれともかけし　外
ろぎ人[illegible]ゐるを抱きて　巴
ゆうりに似るぞうしくまのこ　李
手習ひ七ちゃ紙あら　其手筆も比類　仍
[illegible]しきんぞなるみ[illegible]らん　三

夜露ともうつせよ藪の色あいて　叱
まり舟さ[illegible]ゆうつのそ　白
み[illegible]しほの吹浦の色ハうつりて　仲
宵ま法をきて帰村の[illegible]　茶
夏にゐの明かりきゐる夜半の月　帆
秋の法へわつしさをきいまも　巴
竹の葉も枝に折れしの雪降て　白
ひ担いまをすく野路の花　李

霧雨の玉みだし置なる露　巴
坊の庭にやまし松なる人　蕉
池水の祝ひさはる満の波　仍
麹屋その山の中よりうけさき　及
別ても又といはせぬ色むこまに　中
秡ぬちきりや我をとり川　比
素麺かりめくましん三の丸　三
こひよりわとを隠りふかきさふ　示

三

哀なりき枝も花もき本此花の陰　蕉
りよ敷へ分てり社む神のまき　云
素麺ぬ露かなりきてり飛鷺猪　巴
おきさ出ぬまきは月さむきい山　比
燈火明りつるまとく友なかて　李
華へおとする水のさひし左　蕉
古川のふかれの中此きし柱　比
堤もころへぬ五月雨の山ふ　帖

文武無開をまかはる我涓　及
無らん泯とおもひし世のはかなし　巳
一度とはりとめてもおちきみや　哉
きのひよろぶも戸ふしおみすき　白
前まいるかきほを於此星あれて　三
草葉ちかしかたこ野ぶかし拉　仍
史の音いちかみさまもむさを尽　言
扶無けいのへ名まうしめる神　中

三ウ

る斑しつるに麻や月にかかりん　字
うきひすてつきいまれなき郷　此
無をやかもん滝きい何るらんて　及
おてふしなりよ三写さてれる　三
和志しの立井の音も善あらき　巳
佛一の名を立つるきは前にあひ　白
法士人此書の浦湾おもひやり　此
わきかる網や破まりつしん　字

流ゝ水の引汐によするてらうらみ　三
風のまゝ行舟のちる紅葉　蕉
村雨は淋しく行里かゝき月やこん　中
雲のまよひにすゝき輪つけ　臨
舞とへても何見わんうき鉄　求
人は人もうつろへ折花　及
みくさろえ□は御前のあとえて　去
まつりの春三日帰てみちかし　巴

名

いつはりに雪気の波の浅みかな　蕉
風雅つもさらにひもりの河辺　中
あしらは袖にかふ残引すて　学
まさのきぬ来を待ちる出志へ　仍
や清なる海遊ひて入を愁は　巴
くるまを何かる身のめあて門　叱
舞のあまる雨をする去は化せきて　臨
舟はむしろやいひすてつね友　白

毎れもなれハ咲へあきんみんなりき　三
玉の井すま水もさはかしく　玄
みなしも月ハ見えてしよ領る　仍
ひまさの面け代富士おり宮　巳
初やかに吹きそ梧つま雲の風　白
勝もむろひのあかき山おひ　季
まつ人の主のくもこふ涌し船　仲
花ハ野中よと御き一村　茶
旅行乃嬉やさくらん　帖
霜にもりてひすゝめ行り　引
行をりし春のなかしきもさつきまは日よ　宗
冬月の夜ふすま半天　吐
風ちるたしまに侍駒の雪消て　李
おともわりまつしき海暁る　比及

紀邑十一　云哉七　宗仍七
旅芋十一　昌叱十　三大八
中郁七　白九　宗及
心前九　莫哈七　乃云
文深二

何船　第四　前

一木ほく角やしらいや花の井
去つまかのちゐ心れる井ゝ此梅　三
鴬乃霜よ朝日を待とかり平　芝
みすかんのいほたいを此あなし一月　卦
よる方を波の表舟の猿の声　仍
秋乃あ雁しや磯山のかき　哈

冷しく成て黄ニ成けるなりん　白
松の葉はさらしとちゆ　仲
うねるるはまき根作ひは羽吹出て　巴
我顔よう除る日は法やうなるの　玄
其竹の土つけきも紫を枕は　叱
田つらはほしく成の草村　及
すゝしくと整浮の水やなかれん　宗き
志りしてらりの夕立のやま　茶

浮雲は風の切てはらねらへて　三
友舟とそせるうす晴し梦　李
麻る人乃ましきまに出る春なれは　武
まご預かる雪乃消かね袖　仍
粟はもし下崩いそくれ成文　帖
まきけ米なりし兀あるいは　白
風さむき月まるさき夕暮　仲
ふかりよ二の家みなみをもの　巴

一村乃雲のあみまま淋敷て　去
宿あみ引寺在のすゝしさ　叱
京弱乃いゝふ切歩や濁すらん　及
おこゝろのしてあろてれさつと　三
昔ろひて御乃らみ此草毎つき　祢
ますれし雅のいまみ久しき　㐂
新枕ろしのゝ年を契おきて　李
たゝやの名残もすこぶるわと　帖

羅きて水揚のわろりハ大井川　巴
ちりまかくゑこ色のまろく　仍
きられ切ろし此わゆとの芦ろ月に　叱
月まみてこゝろ草刈たるねうて　白
うす雲乃晴須をたる雁をなき　中
わとありやまて秋の村雨　巴
一筆さときき梢を閉しは交りて　仍
屋こそわらそひ芦茂ろあり　祢

崩かゝる垣にも萩や此窓ゝこ　李
冬田の原にゆく人もなき　玄
夜寒へや承和の寺の夕嵐　白
すゝきは水に影も轉乃音く　三
みるとき入日は遠く啼きし　巳
秋も淵のうゐやさはひ　及
わか家きはあふれ嫌しさも何ゆへて　怙
夜のましぬ拗を暑きてかふまゝ　以之

暁の月乃いほ深はゆきとゆ　芥
夜に催して猿乃帰りまゝ　李
冬をあかふ山のひかるをはさて　三
うき世をいそはなしかる長　白
二月や佛の前に空をきかり　那
わかしいきせる文は北斗　巳
見まかそいふ迄をみ子の奥也　及
おゝきい人也やふかいかとし川　怙

山科乃石田ハ茂草本の中にて 季
おのれ手擦し世よそつれ 三
ゟそひさき便よ形むる姑乗 已
やもやすころや沼ふおそれさ 心
桜みの波侍るのて此ねむ云 恭
みの侍さ人後まてまりの 去
唐土学ひも来よなりて来て 白
やまといふとてよこへゝしや 紀

柳葉ちゝ落り伝さんさゆる水ま此葉れ 三
眺なくうさ河ものやく月 李
猿乃田此ひうき落ゆ出うきそ 临
行のこれひの水はすさすり 石边
あるおと此わしきなのやるきそ 及
いふひなりして言うつ歌二承 爲
つもりまし舟此舟くとやよいまま 巴
すき歌頌いへましへの友 求

須磨に住つる事もあらひすてゝ　何
みちあれハいなゝきのるあと　比
春かくれ人かはするらんかめ　李
うすみのひまの住吉北るらん　白
海原やうかん雲のあらまち浪　杜
おのれとかくるま朝夕まあか弟　三
妹らしき帰る鞍を月とさ道　玄
なみさ船ましむさ菰の床　叶

四いかで鶴野北葉めて　白
いく日とまとの荻なつれ　巴
みな人の夜をそふ蘇花　何
何のみしきおそ渡き行つ　孙
唐衣ゆのさいはき足ありて　三
はすゝへてしもえたるゝとき　李
あ羅なし陸まて到る海士ふ和　巳
春のけしきまえつ年き海つゝ　及

芋野根や芝吹切る風冴て　去
みすみきえ切籠網の三つの火　茶
入とみし月の光をあらはに　巴
蜂の子をそまゝにみつる窓　白
植るもの家に孫来の名残るし　己
竹のそよきも雨に荒川きし　怙
花う
あつまるやさゝ気に此節なる　及
つるそ柳ひくも浜名の未井　巴

風きみ不二川の原松ばゝきそ　三
なまおもちるまでにの草　好
長栄ある疎の霧北菅沸し　白
めくりの窓と入つる糸瓦　己
飛鳥やさ津る縁に海を也まし　怙
つゝむえ取い宿無かきさ　仍

心前 九　三大 十　岱存 九
宗仍 八　莫胣 八　白 十
乾鳥 四　紀巴 十一　昌叱 九
宗及 七　在道 一　宗老 一

山何　廿五　莫胣

玉篭ゆるさは花のわかれ　孙
ゐなかまゐる月の長閑さ　丢
明ぬまて貴切居の別かな　叱
なみのまよひのきえてゆく雲　白
雪をれく山のそうふ和田原　孙
入江とわたす出るつりふね　及

一村は夜ふかきとなくして　李

香のしつやかしぬれかれ　仍

ウ
名利数し枝も紅葉比を前を　巴

まきはのかなる月の夕風　旅

戸に焼ぞりのさ蘇やみえ見まて　三

枝のさらちの人や雨乎しほ　汁

我おして離まかいて鍬あなん　文宗

こし葉の末をかりてすそ切　帖

祈あはい初のきりきも見つかまや　去

夕ふ残すうしてくる山寺　吃

三ふわとを衣まの暮苺比下　白

おもえなりきる春椿木花咲　叔

鶯乃屋とりをとむる窮りて　及

まくれぬとや鳴尽くこきす　李

長毎の沼にうつまい秋中の月　仍

雪切はらししすよのふ蕨男　巴

秋さむき山の衣いは紅葉まて　茶

袖ふきすくる嵐りせのおと　三

はるかきく乗のみ寺く遠さかり　律

らしほやくあみみるまに河の　雲

一ふたは浦の中やそれ例ほ　怙

うちてハ風そよおわるむ露　孝

山賊し露やまかくきるらん　巴

志川しらりの雪乃あみうら路　白

夏まんと數おをたる櫻花　及

あふきの是なと人のそれの袖　巴

黒髪乃色をつるのあそびまくれ　吧

君まつうらみ人も夜のまくら　仍

乃はるへきい月来ハかくもあかぬ　白

旅すとの夜を月もみてこそ　求

書こゝ極さつる庵のてかくま　孝

手ふさの中せいつま萩原　茶

雛様もみすしきたる形を飾りて　宗き
夜のあらしに雨ある池の水　三
蛙子く田つゝむるかに棲渦し　怙
一むくと幸まるわらやすき　白
そのうちもすこし衣を立おきて　孙
よろひすく衣まゝく灯くるる海　吐
冬すかる松葉の火に暖まれん　示
徐よかくえもわかぬしさぬし　李

三

春さゆる扉風のすきま立ませそ　巴
身やみわんほとくつかるる　去
入まれも宮りし里の有明よ　吐
まとひきはいらひく行の主　何
雲のうちも秋雨の種咲いて　白
濡ら衣よろし山ちかきある　巴
めく衣まゝもいくらひくの村時雨　仲
ありしの岐あん碌際の再　吐

しかし秋を種まし蕣見ん僕 叢
やすらひて切くるまのかこの月 李
先さいらおちやをまし花の友 仍
おかうつくなめつし山吹 北
野色錢多く春北雅より家藤遊 芭
ちきれくのちとりのくミ里 叢
糸竹よ茶か世の努か残されん 三
うすわをつゝぬの伊をそつゝきれ 及

みえも多く雲井の月ハうら返 怙
いろまをまるゝ草の戸ノ北露 北
言訳の波ひゆてよ岩こそて 叢
秋のゆふへの恋つゝきする 芭
残しよ書まの老の玉偏 去
市北ありやを行京の月 李
拝ぬる身をすゝむる浪茶よ 北
苔の首の根みん声律き 仙

おきぬつき草木にかはらぬ雪の中　さ
そひとりと此庭ねるよ竹し　茶
喜ゆふ為秋は然も神さびて　然
あるんおのあしのみきにふ流　三
王為さは別まし己頼の音語　及
と紙きむりしてんすそし軽　白
月は程わらましふいとたまひ出　中
梳もうてぬ秋の夜長さ　帖

名
織つる乃音は小田るひ帰くよ　芋
むしすゝてゐる草ゝ紀の中　芭
游ぞ不のいやそあかたる宿なそ　白
みきわよるす川水の走来　及
原し乃かことといふま雨気之　茶
こゝろをむとやゝき絶り文　仍
是めし爲練秋しそかゝをはふ恥　巳
かさのまつりの名をぬそしく　心

秋は淵なりしかるてふ世は　柿
あこかしは夢にまうし志　中
月よりや夕を明ほのかけれん　三
常は菊着るやまれ下いは　郭
露ふかき羅こまわひ夜は俤ぬ　き
猿なるばまみなみさかしき　香
名ウ
おもし世にみなくへいかせん　及
たのむ人こそよそへをはかし　巴
かりまこに移もなね草は比みす庭よ　三
つまうらへの志る雪め　比　柿
色すへき三夜比花さかり出て　き
ゐすふ大和路新乃山陰　郷
種なせ花にと計なく物うき　比
かはんのう比花つゝ植つゝ　中

英怡八　可玄六　昌叱

白八　玄哉七　宗及

藤孝十　宗仍八　紹巴

心前九　三大七　中将六

宗老二　文宗一

二字返音 第六

露おきて萩ぬきかけし衣かな　仍

谷の戸ふかき雲の朝霧　巴

小田返し山遠ざかり鹿なきて　白

ゆくよりをちの道乃遠く　怡

駒の音もいさむをとりきてこゆる里　孝

弓ひきあひさる霜北もなし　玄

萩原や尾花は風もあれ果て　三
むしの聲きく月そみる哉　此
ちりちりみ暑さ折めく枕かな　荊
うるさ蘇の花に夜ぞきらん　求
人めなるくれてつまる程を待ちて　中
ふくみつよくられ出はく　及
笛の音も嘯こそ声て使なれ　左全
軽鴻の人さは家て草刈　仍
至くれ行る鞭といそきて酒　巴
春来てつもしを明をされ切　白
遠山乃月よ帰立むる都　帖
雲のうちちるらて石の聲　李
松を久き親すき悔しき古塁　丟
存も出ちさる花を継らして　三
うるふ川は中北帝は名歌にて　此
萬家を出しゆつうこ地　荊

菜花をはつせの里は見たる人遠　北

やまうときすゝく影も末　仲

鳩まちんといふ寺のまえ　及

明ぬるも春はてなく　巴

あふときも人のとがめはなして　乃

つきかしやすらぬ縁ちるまさる　怡

色つねに念をみちたる堤の峰　嵐

しぐれ雨まく秋の山道　丟

鈴鹿川八十瀬も青くかくろひて　白

月よりの雁を出なれらふ　春

数の鷺や風吹かくれすかもん　巴

夜はすべし去りし家をと　北

妻こそと立寄の笠ぞやなき淡　三

ひろき聖の乃あたい村雨　巴

四乃旅いさすらぬを宮ありて　李

月まゆひゆうしき新の玉垂　白

西川をなても女車に三ツくれ　去
つまれこと葉をはこの主人　仍
守ぬ社もゆかしてれや花此松　及
こゝろしくよりまつる梅乃比　蕪
白妙乃雪に鴬羽吹れ多て　巴
のへよりやまり年もんこ川山　然
ふりきあへぬ浅瀬水の夕かすみ　三
たけつ草葉のみとりいくむす　帖

町くまつ国晩国をとらへつけく　也
いはつき船の雲みられまし　巴
凡涙て月よ啼するき里くち　蕪
はつく暮いみてぬふつきに夜　李
あ残さうの鼻めして繰ん枕かれ　仍
おはしさかい身いきくんそね香　以
神かむくひ横りて人俗物ゝる　汁
生れ来る世のさ紀をとつしいや　蕪

浅よりおもしも左浅の石　白
みふの日場乃いかなうちまゐ　李
梓弓毎川の北路に日を忘れ多　三
関ひらく川と越く紀の山　求
次戸北浦や舟切むこ北清は浪　巳
りをわりましく吹こそ浦おとせ　去
雅面さみひも祇も枚も雪を焼　北
こちんと心ひしくれの北とこ色　白
人いみなむくしよそれか語なり　臨
起会母まを月やともおもて　似
数衣を扇ぬかくこと椿や庭で　巳
君かこころの秋のせをく貴　求
日よ流て文を海ま寺なる　蕪
かへそなくせの世の下は中　北
武蔵野やいは沢沼の石なりて　似
春しばらるく雨の路の篇　仲

誠ねがふ一衆の雅乃筆まて　白

おりの斗やゝ河流くなし比喜　帖

川上乃柳のひまみ比彼あん爻　吃

ちりまゆ女へいさく妖乃月　巳

夜をねて猫ひつりするむらさよ　孝

しおひ切まん人やわややん　三

稲ことある扇おまさみすへ流星　萊

同じ寝夜中も明すく乱じ　及

いろせ戒も常足ねまて立別ま　帖

たまひよらえ振急ぐありし　白

稼をいま声ねね切来と結ひて　我

流してハまじおり我中とこせん　三

めをわやや乃紬不を紀さのすと　巳

さくらくりすま駒ろへてゝりり　孝

霜をいや降ふともなほ妻北海　及

きみやまつり一雪あゝやすく　萊

名ウ

再た狂風の浪よせきたれ　仰

かゐひすてぬるこゝのやさしき　中

刈りこたに田つゝ乃月の寂きよ哉　玄

つきゝたし鴫の飛れに飛ん　比

夕暮乃鶴やら麻を久ぼらん　芸

野とるゝわとゝにみゝりきむ　或

わくゝ兎もおはいはき乃宮七代の神や　三

まて渡へもさそれ三ゝかたん衛わて　佐

舞姫乃わゝさふ神乃名残哉や　ヒ

雲ま丹る日出ん塞は忘ゝるし　及

冬ゝをて編笠ほし書思こよ　仍

行の子神北村高出帰　熊

むかしひの里ま藤んる哥川て　芋

ゝやん兎ゝまとの野風は落きい　白

宗仍 九　紹巴 十一　白 九
莫怙 八　落孝 十　了云 六
三丈 八　昌叱 十　心前 九
玄哉 六　仲祐 五　宗及 六
能世 二　右筆 一

何恒 十月七

あつまをもむは秋なりし海の中　哉
露ふかきみゝこそ風の声柳　宗
ねるとともわかぬ胡蝶は宿かへて　筆
野はゆくしも菅の秋来ぬ日　及
くもる月とみるも降そふ露のへは　怙
ろよめくや雁霜乃をとすきゝ　仍

明やすく月はむかしのみ切かな　茶
ほとこそあきれ山のさゝ小路　巴
一声乃猿を雲引ぬけし川　叱
松乃いほぬるおかり木あらし　白
くるちふる筆にきゝりある宗祇　三
氏のさくらも土るき秋しかき　玄
玉鉾乃道もはりあへぬ秋乃くて　李
御幸のあつまいらく小車　中

織も狩場や雪になりきぬし　及
すゑ葉土乃つもる風の條ゆく　北
深川の波を土りし乃行客は　仍
わらすずまい三尺の衣かさ　茶
遠くともわすれぬ月に寄ゑて　巴
つ雁なせて曙一声て帰かる　承
いはのまふきひかる野辺の庵　白
そくれるまでやはきる植の花　叱

急にて帰るのこ北郭りして　去
あまおろき乃波乃長閑さ　三
永き日も舊き都に北浦伊ひ　什
毎夜ひくらむかしの山の炭　芝
郭公の名はくはすきつらん　史
そしもまひも夏の永き月　及
あきねればさすらふ暮の露　怯
まされのかさと人をとらむる　仍
胡蝶に来りなすむくとの前　蕉
とまりのるを待つまでかふ　巴
いかわやつ遠き信濃路引きつつ　三
やはきにさりる一葉乃すうむこも　去
すり撞る冬田北なし風吹れて　李
されのこりうる在来の一村　白
聖急いて基より後も多川霞　仍
開きてあかれ雲雀啼しこし急　蕉

若葉を掃ぬかりの庭ありて　此
池乃みきはゝはこなるらん　巴
龍鳥よりさそりかへりゆく雨よすれひ　三
時候えらひて旅乃からといらく　李
うねぬい身まくろのきぬや夏衣　臨
はとゝもあらん人妻とされ　北
玉に粧あのふかうりと門りやそ　巴
なつかしにそよろうきに雲の上　白

待つもきしきはきくぬる風の音　及
いそも砕る磯乃あしろなる　三
咲やいなまあそうちしまれ雲のむ　示
うすめる月まいとゝ悲し絹北吉　臨
灯乃影ゝ移くなる国未の中　中
うひあけねまて思ひようかや　玄
仇人をよ木乃之さゝ結るふひ　巴
めくれるなとよるて寄付つき　李

宵のしまひあかぬるにかみかゝりおき　白

附あまに寄にす残めかし　袖　吧

志本のやいは暴風に菓果く　さは

又此坪まてへあきもしの声　茶

子ころしも家と残さるる夜すみ月　三

はるく入江をまてかれゆかね　巴

涼しさやほとりに松の大井川　扨

蛍をはらまく切せしねおきて　帖

三ウ

すゑもに三尺あまり此開どり　也

高うも女あまに心てかそ代ことの葉　及

絵よりあかく人ともまあらほくまき　巴

はなつい折節し是極ち孫の紐　卦

精進や二まかわく乃風ぬれ　云

引すまありかまものこらとき　扨

青き柳にははふきる此遊　茶

何おときさもし三つくるやり　白

宿さがりあひての手廻しの　惟
縄かけ棹さし波に渡すむ鮭　牛
外はまだ暮ぬも暮る山のうは　支
いろさき岩乃苔くまれる唐　三
月清へもそらぬ木のまゝにあけ鳧　白
好まさわさき衣のしきな　吒
日暮しに促されて女蝉の声　仍
清ひしさ淋て家もわすれき　及

一家身持はあきまたそふしつゝ捨世帯　支
一衣をかさまぬ人にあふてかね　巴
おこれるは邪見の国の本まで　三
峠は人をころすあらしの道　仍
いつもより吉野の奥のあきはてん　蕉
めつらしとみなつる朝の初雪　白
山はとのかきねつき出卯の花に　弥
一本さつるい表にさそく了承く　吒

浪の音霞にこもる古度此浦　中
つまさきよれて雁か川帰る空　巴
かけむきに書より後の置追　臨
あみ夜の宿もあとに枕有　白
夜し乃まさねの床に月もなし　玄
多み神の子を身には三もらん　叱
落されと文のゆかり此花か多　三
七日しばらくわるかなし左　李

住もそゝねふる人の室　及
いしを分める山乃井此水　示
行まをおり切石のもちは　叱
はくあまりまつよふ手る畑　蛍
花乃木拵扱あきつふ権層　巴
竹のうけあつる紅れたる井の梅　玄

玄哉 七　文宗 一　右筆 一
宗及 七　眞臨 八　宗仍 八
心前 九　紹巴 十　昌叱 九
白 九　三大 九　了玄 七
若孝 九　中将 十

初何　第八

木枯残もま根に秋乃なれ　昌叱
山色おほふ乃晨明ならは　臨
三とせ切将帰の名帰立て　宗
にくしみもあへぬ夜にならゆきさ　玄
さす舟も早瀬の波は驚の日に　叔
源ーさらふ水のまゝし　巴

風みてそちるや一葉乃柳かな　及
色あるもあしちるも涯りや原　三
杜きりふ露霜や露より際し　白
かりねのまつりぞくなあつき　李
関の戸や夕ほ名を皆初て　哉
去年しとむる鈞いつふなり　仍
色本まあ新て紅葉や山くれ　中
峯かつ道をて子きれ声し語　吧

古跡人家夕や雲の半天よ　仙
常ろかきつ花や塔り小舟のまそて　蕪
急うし浪も狂いかん浪戸の浦　云
波有ますする志かきを江や舟　及
月の園さ縁ちへ子いちやうまで　巳
雪ますいすれる三のくめ尤山　白
秋もきて啼鶯いつ届も紅左　三
実ま我むかんの立枝文　付　外

紅葉散る比まて園乃垣ねまて　李
露まうはめる草のかき　中
分入ほ后ハ雅凡の吹巻し　仍
木さりの能き遠まる三へ　巴
楼や雲羽石中まはく夕らん　叱
岩のうへより木はる勝りき　臨
水まさむうさとせうひのふまて　李
春のうき柴を波まうきさ添　白

座よまゝる落まる此緒さん古ちふ　蕪
さきもつらね常のとよし火　三
牡丹のうちまは蛍乃飛ふて　巴
いてゐむきまろ月おうえき比　及
立くまハ明日永る旅の空　叱
宮古ハくちうくゐるやま　外
神のさもとた調へと誠ゝ多　宗
こその御綾乃多状や此袖　三

僧はあまさら中に忘れきめや　求
おのれ似たるゆかりを所え　蕉
いとおかき花なり陰に笑ふらく　阡
さらしの帯の衣洗ておりに　芳
ぬぎ捨ても形見の為よれ唐衣　良
雲のすそ比あすのくやま　叱
おちかゝやきこえたもきぬ也雪　白
氷泡に角りふ株古木のくま　巴

川上乃雨や霧に残うしらん　仍
うはうふ月を野のひすく　玄
ちりかゝる荻梢乃秋淋し　右
驚かし息いやまのうさを雅　帖
郭云る根の雲に語ぬて　巴
あそれ寝さまく夢の手枕　白
何ひとつ家にいふ胆を忘れん　等
是非もいやみくむつきん　叱

さとの栞をやつくくえいんなれ　三
ひるよりくる宮古まで出舟　巴
門より出も屋とりハお明し祠と山　篤
友なきむらしの春こそ立れ　仍
花めでも我身ひとつにさる月に　中
おくりも待ひし古郷の春　部
汲てゆる水ハ水のともおひて　临
かれをやりつもたりて名さきく草　篤

菖蒲ふきしける此所の情まなこめ　吐
君が為なりの命う者此二前　云
牧司る洞乃融をまきはさで　三
見へし外ましむ文乃いくひる　芝
月ぶえとおとろえ夜も国なや　篤
角をこへしのうちよめる声　巳
隠家は浮世のはてにきうし出　及
すめるかたえ此ゆうきと此山　仍

青雲をわけ行は本のまゝなれ　巴
水上を見りつゝは秋の種　叱
蕨焼火は煙や風のまゝならん　白
まもりつ小わかる小屋は芋　恒　李
るいをくみきりとちゝく放ち更　井
かよひなれたるゆきとまきさ乃庄　云
かつねをと念まつりし君は宮つ之　三
めく車はよひきもの人まつや　亦

川沿の田面も水は経んゆくて　鉦
わかれのともろつせまく行のまま　白
ましさや秋くの此乃露かなれ　何
こゑろくの聲へのむしは書　蒜
萩かねれ月まてわたふ袖三へて　叱
身のうへなるこる魚は見んや　李
夕ある萱構ハ身着さや三かさなれ　臨
松を白かミの中よ切ふね　巴

川つらは尚柳も花によくろひて　蕪

気のみとりいらはみなりけり　三

打ならひき春に別るゝ尚朝　外

無き人のものすれ替る毎もらる　此

わきてしも付にあふことるかれて　云

元よりへ猶なをもいふしへ此人　及

名ウ

啼よ来て立ひきて此国の声やもし　巴

あるき出さうするやあやしけれ　蕪

はなく物やよひしけらまし旅姉山心　無

袖かすゝなる宿のし来ん来　仍

杉くもやと桜は勝はきましく　李

日も入れなる井のつゆし咲うきを　白

不のかなるいるう衣やゝすくる　外

猿こしおもふゆうはとのゆく　臨

昌此十　宗老二
心前十　莫旧七
三大八　紹巴士
云水八　宗及六
乃云六　白八
紹世二　宗仍七
　　　　発孝九
　　　　中将五
　　　　右筆一

何水　第九　孝

宮古人待てまつられ山櫻　　孝
立出客の袖にあさ風の　　宗
さへつる鳥も霞の衣のきかさねて　　中
まちなりにけり雪や春の雪　　仍
若菜摘む野の末の袖を払ひて　　巳
駒のはなてもまたれちるふ　　哉

明方はまだきき月に宿かえて　玄
旅は猶しれぬ鳴門の音　及
ウ
舟の上も秋雨の波乃趣　吧
くりやつまさき此水を取ちらん　呫
霜よるかげ古き壁さへの花　白
かれ枝さへ梅は里のならぬさき　三
春あさき野辺は霞此あへて小　左
風まいよ花は一いやとあれふ小見　李
なまくて桜柳よ胡蝶　茶
とりむも袖はいつまでわやよる　中
ひとふたふたりさらしわやるきう衣　伯
人そろへとものことの葉をおし　巴
住さんわさくしきはにくき道や　丞
あきりあきしもすく身さびしく　玄
起居は心むる月此氷流て　及
なまそまつる暑風光く二遍　吧

いましたる嵜(サキ)旅人きもしの躬　臨

篭てやま路ふ雨はき乃庭　白

涼しさに茶なる衣のすそへ里　三

さけりあひやする妻乃ものわすれ　示

大沢田に水のなかれを挽入て　此

あはれ絶えつ住まじの山居　水

文添ゑらちのり婚ハおつけん　巴

月とされとにさむき衣まくら也　李

古びの葛ハおもしのりまゆる　中

明ゆく秋の山かきりをも　仍

笠てぬふみつきり与雲の影さそへて　示

鶯あなくむ先乃花そ乃　臨

夕紀をもる朝しる暮は霞　白

硯のとりまこころもる筆　三

かまそはいるきをうきよりうき也　此

のりなひてやなこのあまの影　巴

貴彦かとりて久米かひ川拙　希

ましまりあかね元ひのさかつき　仍

心なき我とはすてつよいつくして　巴

うつ人のあまはうちそむく人　白

君か代乃外しそろまれ去ん不　及

色と染ても身によひとる山　叱

也細乃ちすは花乃根を絶て　芸

わたよ蛸るく小寄は潮し清　中

新多きは豊范乃か前残る日夕　李

名也の板屋くやふきたる月　無

洗はせ衣は旁よ我ぬきまく　临

今さらりいくまつる玉津れを　李

蓋法すやすらは葉あしも白うん　巴

さつりぬ酒す路あもりね種　希

今しはしきはこしかくよ言深て　求

ゆくや浪聖の居れを来し　及

旅所を見さへる名残いつ斗　似
さ絶ぬ人ぬ袖のなみさへなしも　玄
おとい里もふかきりはひせりて　三
ねちきかましき帽もちるのや　叱
海つりおとありまう寸程もへぬ　孝
守もするこは神さひまさり　仲
鶏籠乃ひき黄なる衣ぬきて　巴
執は何してもゆきふきのいる　三

三ウ

波瀬ともあれしまふ春の月　叱
あ雁まもよしての聲そ好なる　玄
風さゆる夫は砂乃うへのゆふ千鳥　兼
汀やるみわんそくくはらん　巴
谷くなか棚なし小舟ちかき出て　孝
雲のしつくの山ま川乃つき　叱
朽てこそみそらぬ花乃名なるらめ　昌
世ぬすてゝきぬ袖いすさまし　似

三てはれし宮古と見ゆる月よ　中
おもふあれはまつ身は衰なり　帖
罷よわる坊ふは友もこひ捨て　李
いひなしもよることをはかるし　蕉
ちる花と何の為にか寛むらん　杉
仰つまりては心を包なきを　白
霞ぬへき花ありさきは峯比雲　三
春のはきよく花見清けり　及

名
永き日はひとへのはのうし風そよく　去
梶棒をとてや座を立む舟人　中
若しこの中よ童よしむ一眠　巳
例ならぬこそ体は衣ぬれ　及
色してきます神も三つむる庭ありて　蕉
春ふとの風乃雪を庭に見　落
小はま川冬てうら川夜乃夢万日は　北
うつすと見いひ初にしきと浪れし　帖

川端乃麦比本を咲かけて　似
待とこは去年く布さらし一重　此
ほとゝもうすき衣や寒くらん　三
みそりけんさゝはしらき杖のよ　巴
御俺か月といふ人を書まつれ　白
あくるひとしのこゝろ露きし　李
花もま川外よりの白山宮乃うち　巴

名ウ

行くも本のうちらを此るしつ不　蕉
行山乃すみ坂のきれ墨みゆて　臨
打し下やいはきをみくこえ　三
松人乃清井よりなほ手ミ比切来　楚
いふ迦岩よを記落しつん　那
又月夜短いみかさ比書を知て　白
四面なとしふきみ喜尾しえすま　深

斉十　前十　中七
仍七　巳十一　哉七
玄廿　及六　吡十
白七　三八　運二
盤二　宋一

唐何　第十　三

社迄て花乃かをり比宮井哉　白
あからさみこゆる霞の玉かき　巳
夜ことく池の蛙比くゝ出ゝく　吡
田中の名ミ川そのなきつゝく　玄
一村や竹乃雜よむりならん　斉
きね人色のおもしろ葛深き穴

猶もや秋さむき夜の月とて　仍
気それまし露草村あらし雨相　孝
吹ちらす風のおとぞ聞る野まゝ　弥
おくれ来し袖のやうりいさをし　貼
打くもる空なるから山路まで　及
いまひとしお秋の物あはれさは　中
暁乃ほ覚ぬひし苔の庵　采
寺ばとかりの鐘比まちうき　三

落葉さし林いつぞも深み秋て　白
月のひかりのゆふきりのうち　巴
白妙乃きぬうちはあへ秋みえ花　比
身にしめて待つ人なしやうるのや　玄
夜るの床書こそ不遠れ書けふて　茶
夏より嫁とかへしきの山　仍
めぐりきね探敷つむこ比まゝ　孝
かる比の数をいくつかぬらん　弥

半天に立かねるあさかすみ　臨
とく分りも久里めるすゑ　及
旅人のたよりはふかし原に　等
生ふるたる菌や木のみすとに　此
影くせ水の田面に書翰て　中
夜つれぬ山も見まと　蒼
一とおり雲は見へたる翰を風　仍
秋るはのりまる星越月代　白

岩に根ある河にしも萩果て　巳
人の杖より名やわすれん　丑
清水さめし色めるはとむきり歟　及
とをさあるさい書をしそまて　歩
貴重とはすすし雲み山なれん　壹
志られのあとの雲みむかし　臨
塩のまや教もあすさにかなとて　及
みきり状ひろき履紙りせり　白

小車も留へき程の門なれや　荊
なほ夕くれの杜若あやしと　巳
旅衣ハ雨のこゝろけなる玉つる　仍
身ひとつぬれすかしやよいかにせん　三
こゝろみ草やつま摘ます撓　叱
立てすての旅乃ひさし在　荊
濃おし雪ひとつも分汁はるゝ　然
かすみよ鳴かゝへての山　中

春の末なる月に横雲まかて　李
となへていふ文もありぬ　羽
蝶草にも宿の中に蓬に葉　巳
胡蝶はねつゝむしの鳴声　宗匠
蒔苅の鋏と川はびまさへて　去
とやまはまさき初雪に夏　巳
若ゆきのさへいむ声ふかさ氷　中
あはきはちゝる鴨の羽　李

宮ゝこ乱きゝき藻の山名傳ひ　蕪
妻のはえを持てうらみく　臨
酒遣ろは非乃社に鳥据て　也
きぬかつくれみねとるあかりそう　白
堂きくようち去りふるる蓍遡　巴
西ふむ人をおもとさ羅まうれ　及
基おいてみよの也雑の根をそ　仍
左りしをゆるすみたし旅りの　也

三ウ

宮古人教へ不寿う不月の夜に　郭
ものゝ宋をひとすさ清しき也　李
虎乃牙羽生ゑかと鉄の風をわう　巴
蓍ていえいし杉ぶりとのわ　蕪
むろのきさば送る据へ足の原　也
はくみの末に魚すりさ去ろ　巳
似為浅さす程れさを名残の物云ひ　三
本宿してすいせうしそかや　を

啼わするやまぬ鳥のあはれさに　中

志らぬみやま伐めぐらし川原　李

松枝や花の下かげを相生　宗

乞かひの川かつはりつかな散さくら　臨

日暮しよりすむの節の椋家　我

かへるさに誰つきし某人比丁足　似

出さえ殺か牛に轍うちて　李

吹まゝかひらう月乃笙竹　雲

名

明方になる飛花枝のさゝ飛東　巳

あふて我湯を覚むと貴度　宗

尤もひ我を争すの川かやいて業　白

あとちり立し深の不し　及

生れては天に限ぬ身比命續　臨

はらしある枝に歎なて中し　吐

めのまへにまかろる詞をいかん　玄

うしつけ比理しまへ（いふのまし）　三

とれしはるによる新枕　仍
いなつひかりもきてよふこひこ　巴
竹あめる垣をまま井の左邊に　吡
まさをきあへもなれたき灯　那
おこなひもおこりて後のよひの月　采
例ならぬ身も秋はおもさか紅　李
名ウ
家かりて見る人になくさみて　哉
はまあしにもるよう学文（書）　仍
うきんしまやおかりも古部もありくれ　白
ちろる香はそと結ひうちぬ人　律
花よい家袖をさありし拳も重　吡
らふの宿幸せの人恋の古宗さ　那
はいくら宮古の春におさまりて　三
みちをこすよりる縦太和歌　然

三大七　白八　紹巴十一
昌叱十　乃玄六　心前十
宗仍八　蒼孝十　玄哉八
莫怡六　宗及六　中將六
紹与世二　宗老二　文閑一

大原千句連歌記

洛人謂牡丹為華蜀人謂海棠為花尊遺之也亦如稱欧陽公司馬公之類豈非鶴林玉露之清談乎吾邦之人古來指白櫻樹而不名而直曰華其尊貴也倍于蜀雖花仙王華王之比矣大原夫境致之因

花以歎者夥洛西大原野為
之最以近城人咸吁為官花矣
彼芳野伯瀨境見非不佳花非不
花與大原不抗衡者山林之花
而遠而遠也今茲仲春之初
樞府幕下一時貴臣兵部侍
郎藤孝公假設華幄於其地
而開瓊筵於隨処雅遊三日連

歌千唱浮白跋紅可謂太平之
盛事也聖護門主三条亜相
為之遊頭紹巴昌叱心前信侍
聟日浅寒剝雖華較遅逞
吟俯暢逸興遍飛者何哉此
無他也騷人墨客之萃或有花
其詞者或有華其筆者或
有花其實者不受番風而

別置春 色造物者無盡藏
其斯之謂歟夫門主廼前關
白殿下當棣行中而實秉門之
周公旦也其才德則置而不論論
其尊貴則異百歐陽司馬何
敢望門主耶若亞相則天資英
拔而冠于縉紳之列稔倭歌妙
天下之嘉色者久矣吾染衣之

徒之非輕可評品追攏中華人
物而褒衣諸則雲破月来花弄
影帰中之流亞歟加之道逞称
名二院之蘭孫蕙昆而令聞
令望無出其右者難哉三世其
昌也矣兵部亦細川氏之華族
也於其為人雅而不麁風流
好事在兵馬鞍上吝不絶吟

雖云橫槊賦詩之曹陳思不多
讓焉繇也臨江之齋者歸向是
稱名院殿扁焉且親筆以見
付弟曰栄之亦栄也其採履
外雖不飾内有所蘊以連歌
善鳴世者也凡舉群為宗匠之
材優入作者之閫域蓋合宗祇
宗長為一人亦復以道行尊

貴者哉今也此會席四美相
具二難相并是所以境待人々
待境也兵部囑予以記文々
非予所旬鍛煉者為之柰
何壯歳閲諸東山靈泉老宿
凡記者録所其經歴者足未
履其地身不倍其席直饒強
髣像作為寧為當然乎且是

以含糊因循愈辞愈督殆
難斎拒聊挙一二故事以奉
報酬年意之原云尓

元亀二歳々舎辛未季春下浣
亀陰謙齋策彦叟周良

○浮白トハ大白大盃ニテ酒ヲ飲也
○常棣トハ常ハ棠モ唐モ同ニ古語云
棠棣行中棑窂相梧树名上識
韓家
○缙紳トハ衣冠タミシキ朝廷官人ソ
○操履トハ平生ノ行跡也
○含糊トハ口ニ物ヲフクミワレハモノカイ
ワレサルソ

永禄六年臘月十一日為称名院
殿御追善綴之同十八日終功畢

何木

紹巴

手毎に花をしをる世乃かれ
あらましわとも庭に春草
山のはに落雪残雲きえて
そのかけさむく月残る露
霜とやし枕い状のうつゝかよ

ウ

月影をひねの袖にうつしまき
文なきも思ひいつるとそ出て
久しきさまなる庭いろをはり
暑日影やまとひ葉を立くれ
吹もさつくのゆふき松の風
高すゝやみさ川ふて末まきをし
川なみさつまさをちくみ光
一村乃竹の末なる秋は明く

願ふれ清さるを親うすくなり
みさふまて浣月の光ては
わとも一句しの露なよふ営
冬くれふれ林ふれ木立わくされて
いまつまさもそい桜もあれ
鶯のふるみむ宿ふつき声よ
まつれ花とめゆく雲こゑけり
旅人も行山路はなてなくく

あみさ秋袖よ思ふあやしき
ふともをを惜ぬ恨やはゆるらん
いくとしもへりて休さすらへ
志ほむ世も限わるこそ春なき
もろなき玉のひとりわくらなす
川蛙よ霞城江のえんさへやこ
ほのかなりて切まつらる秋
明波越里妹も渡や揚すらん

二らう

むも知ころひ出ね鳥ゑんに音
長安なるゝ筆紙を山に霜ありて
さすや入日ゐんに方をもとすらん
くれ行もくはあふなるか比支佛し
咲すも定よあらぬにゆきうかひ
西舎なりと夕比も錦は濃の二方
多めとよなるまを月うきを為し
国の戸をやまさいとらしいへ行そ

声はかりこすま鶯こそなる
出る梅はをくれさきこそ友雨雪ま
隅やわさらんの声もあはれ
鷺のなく今日は春来一声かく
くかりよりのおく面は青柳
返て田はひらひやときき望みん
うちつきて切袖の妻うせ
かく山や雲ま雲はこそら人

三

そのまま山頂乃雲まをりさ
むらくもそる梢の秋の月
のこるともれよあまるもい萬葉
さをしかのかつる野原の末の野
袂しいもしふその人のつゆ
若菜の明かるそて秋長尽
うつこわとる夜これ本まよりう
一葉はなしもはかきへそろ

しろやさはのいよよゆるさと
浦わかるきはさへつ折なり
春する聲へもまさ　梅か香
春乃よの枕に月ハ就おちく
くちまくろむや経あかりけれ
住なれて咏も山風水志ん奏
さやまのねなほん葉為さみく
老のめくまいたさりぬとし

人丸あまさ林葉をよりしれて
立まし分なるた孫つたもかあり哉
こまた紀の露をこほまた稀ハ去
月はなる濱のうき波聲をうけて
はふれもと流す秋の川かね
秋なる深涼しきさ方やまともまほ
とくそこの世きん升なりぬ山
常盤木なれふ桜もちりめそく

春乃ゆふへはみるは淋し左
也く法乃なかれものと声ふ日ふ
んなとききもわするこのうきい
いもけの手猶よりし人はあひそめて
ふたみ川みとりの袖をうへてき
のなりわる雲井は庭のふ蓮
ちふきそよききひるる錦は高
二声や花のさ咲ころまてよ存る涼

名

水のうへまも杉葉なかれぬ
萌はとねるやなせは致みそて
秋とみえ川はの色まんおもと
月なの涯てへよく清ふ月の雲
おくむ花のこねまんつるきさ
時鳥声を哭よなきすてゝ
なきへこふる袖をひうき
折りくよ摘てよ向乃花は春

道いうすゝめる引うきのまゝへ
住吉や玉出みゝへよるつかして
若菜をちらしも沖の汐干
日乃出之初氣儀をうすき量
稲乃しをる山の本なしけ
古畑を草生きを多くおひえひて
唐いうふ人の手をさるし
久り
すゝれを身を枝をとふ本正端は

分家よりえひの語いるふれり
堂ふくよいさ銭いろむく碧あた
うきを麻やうて梅のおゆへ
春の雅を思ひあゆきまえつり
あそれまうえひて星生野
草刈を樵を知りし酒一舟
山のまえみく川ほし乃さと

何秋　寄二

飛ましと埋おも物淋き此花
なやみすみるく月此頃
鳴かりやこと一つよ別ゑしん
風もあらしに吹かちる比
涼しゆも夕暮の秋来て
鞋やまの霧ま袖のさゆす

う

藤のまこいそおもれん荻ちると
ともまひあかね枕してり
理史患わさり明窓来て
いつしかつりま志本此ての雪
外のもろこ法うきおやさまむらん
かきおらし玉川其波
搖風乃みちく為てにまさひしく
あとよりも枕小舟引
舵

山ざとや前一村まてつゝくらん
ひまなく見しも月のくまを
鴬わか夜は秋の園にとよ
清中をうりやは鶉にまくら
思ふしれぬは涙の世にかけて
錦の露かなと見さゆかなく
ねかはくも粧ひ切は花成
みちよよりの粒にまし

春こへて隙ゆく駒の雲
三つしいろも思ふやますも
人分さ様兵る人に此夜かくて
いのちにあるくはなむかしよ
あかりふ身の切木のおちきかや
すかしのもとむる東海せん屋
年経ける程二文古此世をうつ
柳さへても折るくつく

山川のながれ水たえずすゞしきま
つる川のかはづ岩ねをさゞ波田
清しさを答ふる庭のかげにて
むかしより夜やうちわすれん
旅人ときゝ来るは秋の月
古里人のむかさ遠き雲
形見ともあるき枕よりぞ
えつねむり何悲しん

うつしてふ山は独かる天地とわ
すむ知りぬしと又乃うしを
蛍波越はしば駒うりを立て
松の木陰の寺は地かさ
すゞしき庵かきは花の色
かへるとも初さ日清きしる
春の夜は雪は常にをちぞひく
竹のをぬくしかはかなり

はるはなほ霜まとや波まさこそらん
切ゝ人をなき霧なし下露
松虫の啼よもすから此月の影
秋ゝは見へん人ともや　は
三
夏の夜も長独寝と歎身よ
うきねるひとのあゝぬまきね
御きは更まさりし梅る床のそて
かすいまちてみる百夜なんとち

おそはるふ露やはなちとはたのうら
名をも雅へよりをち此薪人
草みむも続きくれは立てて雪よ
かたふく山のあらしそきき
家ましも出るをあかる流のせまし
ちりまかりて合川る妻情
秋の夜ゆるきみ此枝は恋しもらし
みしきたるまかり月此川は

須まきぬらき秋ぞやさしらん
行いきしきそ雲にまられ松
名まれをそって此輪いおりひき
来世の鈴とゆるぬらりかね
待へし風ちまるは此出て
貴そいり此雲有そら寄ふ
さ不婚やすしき越え此紀衣
眉にあらはのわく秋あ御

月をみれを小笠塩此の石にかくみて
うきねの水此みずまた方乃松ら
斜路の帰て則来此小田原
當そて毎に人の口ひち
我のミ此葉と何に思ひれん
わさしん捨てしてしもほ
又も世に生れんるすい程らあし
まゆへまれて身の苦しきこえふ

名
佐久ん宿きりしの浦洲て
わかねるあや波れきりし
きつかも示切ゝれ翁ちすミ
息しとも袖にきゝぬ妻ゆゑ
直よひるき花いちりぬる床ぢ
吹い苺やも岩のさりしさ
隣とい那もうこき篠れ居
かきみまんと?ねつくしひ

宇ゝむるよ月寝ん根の羽あゝそ
まなれき小さる中いくやしも
鳥啼て明る日を思別
求まよいくつ月はやうえ
雲霧れ山ゑきぬる谷乃水
そくいつゝれ石乃りみちを
名ら
入相乃鐘は清ふ書乃ゝも
はのかるかりけ雨ねさむきに

焼さえ立てしはまる出来て
蚊のゐる部も関守なけりく
書まどりや松のゆやまき招きて
待ぬと強く去れの形長
引し乃星の津川にまちて
ふみわけゆくは夜ふ明田

何人　第三

せきさは三笠ん此花を記
はむよすみきれやうす袖
笑分野の小蝶も中より定らて
色花帰る也春立つわくらん
開の戸も山のはすむ承臈
あとことくしも別れまはりり
はのうまうろ分の津乃衛士小舟
おちもい水ののや川の末

う
初雪や消てあとなき比度さへらん
面はなりける花の明ほの
夕暮は荒海にうかひし嶺の雲
ひと川しもむら　積帰ー
まきれゆく小家やうは比叡石
あそれにのみやこ由かき竹かき
兩人の久しき姿乃名残　さらひ
入日は名残りのうすき衣手

吹いはらふもしり秋の風
乃ぞみの山あらしよ比鹿乃声
露に稲妻にみ比稲は露をひそく
うきかたの月乃影もしろく
見ひきて帰る中比う聞
聞はりかとのまく比はまるのき
道の辺いまきる雪乃あとこそは
うきえ恋の〱　梅よりふかう

二

鶯乃なく宿に明かあさはゝゝき
すゝんのひまみちつゝき乃中
一夜けしきの枝にくちふく
霞まれのこゝろ茸の桃りの外
月ならてらふ人あらねさ秋枕
あるはつかし床の秋の夢
顔みて娘はみきすみ聖へはて
なひきあひやうる尾花花ま乍ト

かくまぬやすゝみ果まよきなん
ろことい水の音もわられまた
折てみ袖さえき梅さみ五月雨
ひらるや寺のひかりなりれ
あふさる稲をまるひよあゝして
たやまさらふ人りし山寺
みなめしやといなせとまれも惑ひてよ
をうしの命一ふ人なれ

二

鐵をはあやしき玉は生をうて
柳散花はあはれのくつゆ
木をもゆつき雲や雨あらし
吹くつまれる風のころこ地
京比海やと秋く入きて泊舟
歩りともりさ人へ出るハつるやま
落雪とみるらく入るも立ひて
りりのしまに宿月もすむらん

三

杉ぬるさ秋もとも見つる衣
みうきさ夜とやくを紀あつき
まちくて別いとうを何かせむ
向坂やまさちきりさく人
心くて花よ蓮は池へゆして
あれもや雨よ玉に涼しき
村雨やこすのまと秋よ賑ぬらん
山ふみとりま雲の立るひく

三

そよりとゆきわかるゝ雲に水
友よふ鵆やおもふうりの孫
長旅の身はわたりさまる舟にて
海わたる人の国なれば苦しさ
契のみぞ又比おもはれわかぬ世ぞ
いたはりそへつるなれ比こそ
萩原やさけるよ来の波ゆゑて
らちても雲月のあかゝれ

三ウ

いましへ乃路ぞ秋のこすかれたし
らくあらそふかきに寄の立さる
法乃声比あかりゐうきや音は
色なきに茅栽かつしきの誓
香よ立めをはて花たり比夜そそ
いくゑそなこのつらむゆまし
春の來や鐘の響をわすれたる
うちとけてぬるゝ袖はきるしも

黒髪を我手につかみし筋かりて
まれもひもまきさす揺らすゝたし
長月は翠行き北小雅の奥
ふのむさうりもいさろゝぬとち
荒て切月接るやかの方とみよ
名
雲の海ては れぬるとぬ山
冬北雪腰る秋の風さむこ
あくれりも世の陸ぬるきこえ

あち村のそて海うさゑてはおはきて
まきらてうたる中北あし原
去秋うき文坂柳やらてむれ
名残りの末北と紙うさ北さと
荒ぬきはうきの山峠本村ひ出く
馬は嶺おし野ありまさ入り
いましいと神のみか紙るくと
ゆきをとられしと秋つ冬こ石

川風やさうわてる程もそゝらん
月まつ所は閣堂本のした
秋をむねと時雨比紅も書ける
冬のねとその月あさき
ゑら
寝起みましも打まてゝもなき
わきゆる人の一筆いたし
するこゝくむかしき歌を名残
いまもむかしの井手の水

咲れんてはさん花の庵ふしそ
冬をこゝをみる夢はつ庵
雨おときゝろゝ限も取りよ
閑てさひしきうきの草のこと

初何
貞回

暮待よ切来もちぬる郭公
志るをやまの花のこる頃

曙は峯に白雲はなれゆく
みさえよりつる月ぞやさき
かりてける稲葉も小田乃原
見わたせば末乃葉もしる露
露こそ風の波るなりにけり
まくらにもおきこすの玉霰
う
新ちる山より出し月影
ながむれは嶺しき雲の絶え

かつ消ればみなれの河はしとて
みちのおもの水乃おりまさ来
明ぬともまつ夕露しる宿
とらまへや宿らきけりなん
月みよし影おきてる夜なくは
うきねし袖ともおよめるより
霧子るも雲みてるきれま遥々
ひとりさむしく月をしてふ

二

時しも通ゆくりこそ侍るなれ
とられハまくらむすふこの月日
浦つたひや三つ石のほとり
まさこのいとうちさきつる声
夕されハ雲にさそふ嵐吹落て
木のもとにうへたん和尚をもる
月ハ猶山の梢にかゝる覧
すゝしさ林城ふかし

うすゝねの端井ハいさき出乃道よ
塔尾とよし知る家の家
着てもかくや衣をすむらん
久しふるまむかふ空の月さそふ
遠きそしてるれくる浅香山
のくもりやま川雲のをわかれん
雲かまの芦葉のゑハ苦しみそら
わきてなられてしまえてくる

畑しはきやわよかの家泉河
こうくよしのれ木の枝
山からすその底にも鳴きて
あくがれしもきこえし此月
秋にゆる花見戸しの葉けき
家やあれどもむらさきひとゆくん
くれはくはわ野にすつるあきにを
すめる中にいは菜逃生大事

ゆき枕かの菖蒲折りてふきとき
家やなくとも後おもひわづらひ数
梅かりも小袖をやへかさねては
ゆくに女郎花こそも花さく夜
まねくひろ風のしたひし花もて
うすあかくしてる月の一こそ
三つの州渦や七宗の波の鳴濱
あさつまふねの行き残さし山

うかし勅乃急務を聞て旅の宿
あらふまゝやとく人乃若井
筆硯の粮てもしろね梅をよせ
こゝしや西にふしぬりねとも
暴風をしておかいかを最も雨で
ちりうれしもをし花も散戸
林の里残まへみた庭しつまに
月やゝおまくめるそしうき

かつゝきれ桃とふらし夜衣
竹のそいかの小庭のさびしさ
雪月かる庭の荻や絲つゝくて
おとしもいまていえ知るの色
身まちつくられる初の老の底
ゆきましうへいつし後なる
松をまきこはふかれめ山ふきて
ふわくまふかりし花をきうる

夕暮ハ月出ぬまをたのまれ侍り
林のしくれハ竹のさえぬ砂にそ
鈴のかむなしき月の宮出て
すゑしつくれハ小野の細道
冬みなき山まて鹿の音とされ
ふきさらしくも秋霧ふかし
一むらハ入日乃色それみゆらしく
波寄れハ花そ磯へなたれね

みちのくのてや塩のなたとてかねん
うちよする若菜ふんさけきまく
春毎に又まて梢も花ゆらく
いそよそむかの家うちむ雪
朔朗あされ雉子ね春さき
あろり残らす酒を程りやハ
いるまて枝多み人ホうれ棲
紅てのんつさむまそひさしる

そこるひの中らに給れ給ひ候て
いはゞかぶ久しく大嶽乃みち
光うきに若れうしてひさと冬かけ
雪乃風にきそて冬ふかゝる
吹さ面む漢もおとしみれむ柏
いほやそらわ枕ならきち
条ていて京とていうむきなく
神しるみてこいまの明けんかを

うらわや風むかの文に麗ら風
青ふりれ柊くてしらさき浦泊
しきよしさや夕れ乃そふ津はや
舟てみれし清くへりゆそ
呉竹の山さらしてくきてるり
霜秋そらわの鐘小そし家
去さむかし枕の笛れ地をらさて
色のるさまつのえひ乃末れ

別るれは袖もくれなゐの歌詠発
月と川やしら浪のよそ能る

山行　背本

云伝ん出く人ちまあ勢しこれ
むかし浅思ふ祈のたゝらに
いつらみうそねまの夢覚
袖ちる文の風にまかなら

稲妻や月おもはぬ浅出まさらん
名みぬ音ある村雨かんそら経
日暮しれ夕をはそふ落して
秋の空こゝし山陰うつろふ
積もり萩下草乃花さうら
うすゐる家浅いつしゆかや
春はそよ明れさりあとね暮し
おとにゝましとまてれしのうし

雖西ハ歩く後もとらまく
ゆはくしの気なかさり
今こそも花色かるき頃え
色わすゝもしと志らん奥山
うきよを残さ候木のもの月は營
夜さむらすしこ猿ゆそふ変
林の霜許ふ桃てめてわもて
おもしろきのうそみをは候ふ

うれしくと御ゐまし賞の祭
示りくのある候ましいり
菊や庭ねるや霜よ入日氣
あくし宮みを川のとらのやま
木のしれ畑梅うこ八頃のほて
ともろしよ雨をうしわされ
家や又とも海のまこふまきのん
狗きへつもん人くしわしこさ

くれ竹のよには神ふむすふ風吹て
すゝしきあかね生まれたる月
う浄禅んと思ひなからもなをよ
ろきみの上東残粧わするれ
跡しいし世に生れあはんと思ふ
は素ふいはしいまそしやい
嵯峨の鏡岐ゐる寸嶺の寺
いてゆるわとしらの山をを

嵐山や遠れ河をはそなん
雪のくるて兆月の志ゝ波
雪残ひろく西そるおもきま霧
孤そそるまれ西なゐ乃秋
さうきこそもこすとふ鹿野
限もるちるき夕くれの山
一思ひおもしの都乃雲ゆれく
西にて西りしくみて味ひ

夏はてもしろみなつ春やまた
かすらしあをたのむらしく
川音みやまふかれは花よ白浪
うつりをわかりきの山花
折うちも毎はかり限なそ
まつ人をすぐてふりまて
世のうき浅春しかし石山之九
みすれん時浅き夏の字しこゝに

はくらみの糸もみしきさ秋風に
気るまる芳れとき月かゝく
月中ある前中やかりま萩秋
水のもり水の雖流来玉川
明くては浅瀬浅や波流きん
名まんて佛か母のあくさ紀
春かり後志けりなる柳糸
桜とくいろみれ来のあをろ

すまゐある所ありて萱れに苔屋を
板屋の軒のおもてにかゝる
ゆやうきも日かげさす窓の下風
いくむらの竹のうちそよぐらん
遠き山乃すそわに水のうき嵐
いゆしく舟もこゆるいさり火
えましも宵えの月影して
林のしられやゆかるに猶見え

家こそいとゆかしけれ春秋
いくまくのこ草むらくの末
山あゆみ鹿子舟すむ紀行て
しつか田面をうちならひいる
さるかしかちる氷なるよ
あきを露寂川との名
ゆくつとや板の葉かれ花咲て
むかしふりにける里の淋しさ

篠乃葉に吹しわたる嵐風
すゝしくなやわかの山さく
晨明の月ハ入秋のはつかく
梳の葉に名おかしまし
身ましめて思ふに露にもる
袖の上の露ぞうすく散ゆく
えにも川る夜ハ寸夏立そへく
木の根ちて昔みしらや

あふりまく深川の夜やならん
つくさの波浪にもあらき音
満ちきて稲わかつきに吹お前
村雨わたるみ孫のしるきさ
うちなしとおそれい難きつらやめ
はし入めしもの也しきま
聴りしよ嵐まし人さかで
袖しとてもうちみくれる

冬も又かれゆる野べのみちの枕
まかれや雁ねや板敷みちら
古ことは語りしつゝむ捨てて
出てめぐる深いくるひ
歌しむ歌は八雲をも鏡の影
身をそぬるは涙すみさき
旅人の林をくらん行して
こゝろいてしらしも衣うつ津

何田　才六

山くしも月より出るひかりかれ
はやきわつくる水の遠を
ほのみゆるあし分小舟さしてそ
ひそえきを迷れてこゝのさと
おのれも夫の為のゆめや晴らさん
まさみえと鈴虫をゝねぬらん

ウ

日比冬ハ一夜あらしも宗まで
うりねの顔にしはくさた
野ハ若て白きしつれむ草鞋
まひしえられて志る人まで
無やをうらめてふおさ海
うらこそとる残様にも中にあれ
花くれるひよふさ蘇然
月や宿りし旁りとむらん

篠をきさはさころかしれ粒浪よ
りるめてしかさ三ちの小出
水ハ幸てはつえれ下よ高すく
人を残しれふ神のあらわさ
やはし白る車あやしさ誰ね
ひらをれもかわなし人けり
白髪をこすれさりひの都そて
年らんし白くしやうくし遊

氷りやみすも地ひ切まりれる
夕されつゝき袖乃冬ゝ
旅人にあふさかの山の関むかしへ
まいられけさの縁ちきさり
法のりより恨とききくに備て
ふふにおもろく生まれしの雪
明ぼのゝ花乃木末の郭公
更にあたちの行きいる比

一村乃ちりひれ山乃をみえて
秋のやれありゆき庭もし
月影なく露さむしてほる紅葉
うれしき中の声ゝの声
うちあひく赤もすくなき清
川島ゝも岩の水のひゞくし
くすむにみ網乃うき縄ゝなかて
入日まてゝ行はなり

あやしきはかりよ色つくん
嵯峨の露ハ杖のねりの斗
ひくもうるさ萬北小田北原
しをしかたふよくふ一夜天ふ
師走なきやのあちよる残ん妹か門よ
こうんといふもあくしかてし
古塚となれをかうし残さへて
菜もゆちつるゆのきの書川

春しやおうし葉よ鳴ゐおらん
そめるやまの名は立川きた
わとも今桜あの茶すまむもく
月のうつあをこりしさす袖
梅の伝ゆとのかひ緑なき残よ
雪あをうらしこ海へもふ琴
冬の北も聲は草枯ならみとりかく
松も日まうきかり　七本ゆうさ

三

夕附日かげに跡をも秋すゝし
いはくの露に袖におもひそん
恋ふて寝し比は紫の仮つゝひとりね
ほすき草こそうきなみだ
寄るちねに別れまねぬ手をそへて
思ひかりなる宿を忍しき
さりとは誰を吹るすゞ乃風さむき
本くれまでも月いのぞの秋

三サウ

引水の流も浙ましつまりく
蕾ひらきて残夜も川原
見てまるあらね市路に山なる陰
寺しきとても加すくし乃袖
鶏やて寝つき不来下に帯
新手枕もいちきうきそ少と
古人のすちいり来にや嬉せる
家のるとみこしと也若しき

哀にも見えしふるはた簾にそへて
むかしくものの春もなりゆく
うきも又若木の桜いつさかん
かれ行さゆる浪の上にしらま
清よする舟に夕の山おろし
月すむかたの鐘の一こゑ
秋の夜の露の袂にぬれし袖は
香のきくへまちかく霧しきて

右

陰あさく見えつる草の原
つきかりと夏の照りさやかなし
みちとをく思ひきたる氷室山
こころしも引き集る清水
面影にみられてまし夕烏
見にあはしのうせやつきしき
月よりも若き植のなさに似て
ちさしの庭こそあらぬ梅か香

きぬ聲ハはくさもなき朝
かすみなりきり清き水のきを
立て切庵なき清ぬ山かきそ
ひとりハまかりし袖の秋かせ
思ふといいつかうちわんさ衣
うらしきあみ寄みさむしろ
ナツ
夏ハ寝て三本かアけれ枕して
まり川をかとくきいすきそれ少つ寄

舟人もなりふもなきき山冬そて小
あくらなかりし一むら比叡
雪みえ王ハ積りつゝ在ぬるなかて
あ川り日影をさ雲のまかし
木のゝ木とうらひ出さらわてそもう庵
ひかきりしなそうて端　玉比

一字露原　寺七

雲晴て空すめる夜な夜半の月
しられつくさぬ秋の世乃一更
根の葉におちきり作まり交えひて
花みまねひのうつふ山みは
一とせ里ゑすミ七ぬる歌はなミ
妻の入日北波ゑすうなれ朱
深しま積の響み修こきて
はとをいつくとゑつまぬ野み朱

玉ぞこれ北在もありとゆみ草たかとこ
切人さきの君り無ののちる
河水の下にゑはやる舟みてて
はのゆふうきの月み北ゑつけきは
難ぞなく風やこゑぬてもぬる
むつ雲いつこさりのかるやま
明方み北来守白雨北山嶺乃雪
はきつきぬる　梢いくめと

行し人も里ハ柳にかくれて
くすみてたつけふりの一むら
春やきく鶯の声に文やらん
くもりもわかずひかりわきまへき
来しかたは人の心の鏡まさく
うちまかするは世こそあさまれ
世の中のかさむとたる為ありけん
名残惜しやの軒とふきむ宿
まさしや出て峯をさかりかすく
秋風ふへいつくかへりみね
かゝむるに出ずる月に桜枕
雨も霧ままに山のをそかし
江乃むや入ねの隠の方さる
うちかへひ来る松の木高さ
人も見えつゝすむ山岩かくれ
物ささりかくれ人をとそしる

おもしろきは此都にあひ都にて
ふく香ほのめき出る梅の二月
おもひやれよあれつゝ後法花
法隆寺国まゝくみちしおるも
奈良もとろ西大寺伝来て
池もみきりの花まんまん雲の端
若菜みおりて松に生かされや
二月よ露よ毎日川原られ

月花には楓かさんまて
恨しむらひある秋乃山まと
あかりて温泉湯のさ薬有
あきさに小みうら人砌し
よしさらはうつろふてよ花果よ
名也て草まとてふうる袖ね
情人源為頼に申和中にあらし
さみす池さて又明てつき明て

おひてこそ春や昔にかへるらん
山さとまくもうちかすむころ
こふ人乃わかると雪みせむ清て
夏よかつもいさつぬれさね
百敷やみちし乃みちめて都すき
那かみせますもそらゆるとそなき
ゆかりとそ流し碇まも郷ハ行
きつれしもちいまやまつし

まわらし乃そら寄き袖に鷹かて
ゆふられますと所をなれこそ
日乃出てる浅わる渡みせ舟の上
切わしもゆきあまつりみせて
中天よおり居し露みゆるて
宿の上不のこま明ぬこみ衣ハ
命しさのや松よるくねと秋の月
さとは飛こゝとも雲まりわれぬ

鶯ぬまては老その催つゝ李花
わすさまなけり屋比來し
御仏へわはれかしき海ともなく
人ま京をうふ人なりけり
見ゆる寸きを奪ふと禅の文仕へ
よそまかそると言うわやしき
かうき名や雲の文写き花をそ
言も乙とりまなひく春柳

名
長閑さや衣のうみ女の銀朝
うき世ら見させ女わかれ恋
裏拍乃聲中に恋あそれなり
ろめふい秋の星いもろすし
はなうきい宴ようしおよかへふ淀く
のころ日うすきい山乃うさおら
一本の妻に稲もうちかゝり
おちあひ川さも水のもろさき

かしこみくさいきなる佐保川
いやまさり行思ひなりしも
独はへこ世中此なりしすそ
ろようそ梢ふきくへならん
来ぬくよ影すくなる月をみそ
のこ輪嵐は衣手のはな
日暮しの声（サク）山中隣荒て
見いろきの梢そなし

名ク

吹まくよ声よあらしの花散て
冬すさまし色は明まてるれ紅
鶯乃寝覚うつゝの名まこ
あこ行に程猶此時乃萩原
兔の聲ともねもみるよ瀬とち
うきあとかのきるる水せ立
折むの紅いんは和の糸く
猫まそこひろろつみされ其奈

仙人ありすみかは何よ出つらん
芦刈きひのちりまき谷あれこ戸
麦畑よ川色に麦の枝折て
蕗も春も芽もも下り人あれいろ
何路　寺八
いなつるにも見や待ち新月に月
野への鹿こともわらし　つふ山
ちとり人の王いふ枕かにも思あべし

掃かれ神や雨かよめぐるあめん
川は世乃中畑は書きわかれて
めくり行ちりみからに行の跡
冬なつる玉え花咲匂ふ梅
ウ
うふことよりも なるとなる の春
春寝きさや田畑し山路にかり枕
まとろむかとの土にかれし夏
毎ゆきひし舟を漕つまる波の上

さびしき山中にみへにれゆく
川のなかと修行の方は音して
猿さびしきまてうれはく
鳴すさひ又鳴あかる林のうちも
くもりぬ月やおもしろかるらん
嵐ふきさら山は木のまれ光絶
くもりなれにみ名残おらし
住すける野寺の頃にみれ冬籠

二

者ゆる世こそ暮れつけける
是非なれ龍あ来の落ちく
人のうへてやまる寄ねて
あこうろい花れ浅思ひ離るし
ちるひし神とうふこの縁
そひまも夕れも浅まうき
すしき林の風いましてそ
有かくる山のしらつ月出て

露のまくきれ志く葉の多
鳫鳴てやゝ宵やさむからん
衣うつ人を思ひやられ侍
本情くと浅みのうち込
みするねとてなき姫を
生るうつゝは浄て極楽りひ
まされしむるをひろけ
横色の浪ある残秋実明て

りまいのふまて浦されみちぬ
一念は思ひてうきね歌云
春もうすもみれゆふくれの月
うつくしき仏の證をひ捨て
うけこる枝ましみ花さ
約る月や楷の林しあらん
折ふしき秋の志れしみ氏露
終よつる虫の声も河はのあさて

三

さしかゝる残もくるゝ日影家

海面の庭盆門と網代の辺

みちは暗路風そそる墨

浅村の柳の手は紫志きりん

あるも多きうれ鉢くれ留

秋もすゝきおいゐる苫のふえ

うちある頃はうてわまれつ

綿花川る浅くも残寺よ海ゐ

くもひらき残雪中に北道

みしおの庭らしむ家と増つ多

さらふ志あらそする山

すのそれ玉うやちくらては

ゆむきゝ知衆も鉢まうなか

村家やはえてなりて家ん庭

図画ら書洛き書九春

林手さ風いさ葛みうしきて

夕れ暮の汐そふすしきさ
磯伝ひ月も砕あそゐる波よ
まつや虫もなれぬる夜の錦
すゝきまねき野への薫絶へと
志ら浪とうちもあはれと詠る
梅々も寺よ紀乃木のめも青葉
面のとらかせ明ぞ行ゐ秋らう
山れしい霧乃ゝよあゝし風

まかるゝまつこく舟そうちいるね
袖てしも裾ゐてし腹の今さ表
なみのくゝ人の乃手下ひと 枕
月闇き程ゐ残あつき夏衣
夕せとゐしてもむみのこゝろ
遠山れ霧残みさみいつん庭
まさゑかさ比のりみせゐ縁
林の日れ夕紅かうさやらまて

名

穿つくれ偽ゐる垂川志く波
一よられ水のみてわやみな瀬
ならふ小ら連し皷るあしろ
並小男や邑是時線も分仁ん
婦りくらすゐるそし山の尾と
渡寺ら伐習乃酒ら樹り
月いゑ来の中ますむ影く
むすてひ乃明れりしね狩そ

ゆき箕とあし香ゐゐ
毎して秋の末雄まとしろ
ほらのいうしれ望川ま比
志らすくからひ別る紀あせ
うつろひの萬え坂りの色を
桃吾もいぞ又霞の底れと
ろみまさくうし宿ら花し
結て蓑さむ衣の裏もそし

名ウ

きしの柴もえこゑにむら山
稲葉そのあられはしる旅人
はそりん物ならき石の室
うちわたしはふもとむかふ家
峰の松みねは志ぐるゝ空
積もり路ち雲あらる嶺にて
あらき月乃山のさむしさ
霜しうられ川音たつき

あし辺やはまならちゆの
実

白何 第九

鐘の音きかうはじめるかな
月にむらしくさむる秋
萩なみさみ苔むすみなみかで
いそまくらかぜさゆ

猿しつゆゝ兆川霧晴なれ
はるかる層の音ふきす錦
林風残つゝしたこゝや紫らん
雲の末と浦の釣日に沈まふ
秋のみ霞ちしれ晴れゆく
うくれ雲そすぐし湖まる
形見とも埋ふ煙のこりて輝
ゆくさとのそたらひつるは

波高し かくこい老しむ水
あつ錦ひさし一葉の外と
絶くて錦めつしき瓢に
京古の月乃あらた空は
もろし路やいてん紀りも白露
みられあひしるくさしの袂
舞の袖くすゝのむ乃わたして
此の名そけれ忘ひれめかき

りよ忌て年まてものことさ
いときなき我とも身たるを
思ふその中わを中よりてひ
あすはかくき別るをそら
暮時して一更れ声もひろきあ
はそれしるみ山の月
行かくらか葉の末にわたるを
露の身村らとゝかをしめ

岩寺もむ離山のてられるまて
人のとられはあかわりまして
見てる向後にそこらされ世と
とうつるわとともし大和あ
春秋の衣とし旅の身無
草木れうとしするら山の川
こそれ細乃庵代にふさかそて
風まかせしたるさくの他

冬されとをしハ見れ有明ノ
うきみの夕つきめくすてめや
おくなきよ深ハ春雄れ霧て
梢のちれ志てふいてかれ着
咲れ梅のしらえて深萌さし
うちふそくりしみちそひとき
家しき梅を家古ハ宜難て
さりし大井の風にわかむる

時雨られ夢ん嵐れ嶺乃色
入ことみほりけさになり
折残る木れる残みまハし
水のうまとて草村まん
春ハ寺て秋て明うれうす氷
霞やうすみれしもわつ寺
篠の葉ハりし初る宮てそゝき時雨
うかうつふく草義のうら

いさゝか田面に秋風ふきて
昔の浦の月影かくし露
村雨や露の雫にやとりけん
柳うら枯葉末の露これは
すゝしけしや西行も詠しける
見ん事ふかうら立ちてうや
申すわれは世にしらる温泉よ
こゝろのましみうらうつし人の外

風あれは雲ならぬ白雲のほし
まされ寺のしも波にゆらゆら
釣瓶の夢を覚し枕さん
何とてみるわけゝくもの
むすまたしさとるは落て
なるは本の身の水のしらなみ
春や秋深草も深山れん
わかすめつて声をゆるなる

猶て遠き住居れおもひはて
ふうふむ泪てたえまき秋よ露
初秋と定れし月やさむし風
まくらしらく帰りかりしを
るひきは庭て時雨葉露
のこれおきの露みむく
夕立れありし泪さみてらく
よろ町にとし入海の雲

名

待るへしたてふ船水桃をさし
多ゝらる春ゝ海ゝ草の
おもしゝるせる波の由枝
うくひして花とれ家の春都
むの春雲その法とりすむ時よ
ひとのそうれする恩のてうあ
夕波れさらと細江の山ちきそ
はらし塘さんと絲き一すち

あしくからぬ道ハ芝生に先枯よ
行方しらずこそしらぬ露分
吹出る嵐のわきに月細て
枕し秋のはらつきさまん　笠す
はりたゝし旅ハ寐覚の夏かれよ
いそしきすむ門かきをそ
ともふ人のなる程子出し求ひ
那らんし名残をきえゆくるき

七種よむしる葉をも抔はさなく
野のみもえわし色うれなむ
はさや庭ね錦やうすきれ繋らん
志てはゐる秋の明暮ぞえそ
月影も山のはるゝまくろひせ
秋のくやしいかりしなし
霧やしくうれまて霧よむかなん
草をまわる残はくまりとろ

何墻　第十

嵯峨の山家乃中りん住なれ
本おもしろき書をよみ書
岩はしり清水の音をきゝて
うきは雲よのわたる月を眺
村竹の寫真はやうしと遊
また残ひかしも月乃あかり明

夏衣しとひとも又御覧して
またはしもとりしゆきむ一ゆの
こゝろよくる薪乃いろをかへん
みちみの方にある吉ものあり
いふしやさしやみるその快きて
残村ちよりよし帰て立往来
うちあるかけし田の畝のあくれ
月新しく海雲なんとみちきて

里ハあれ旅人ハそ悦ハ林の近
夕暮るの　雲もしの郭
こゝれんとなる　地ゆうしもすゝて
きよみそ川る須乃那さ
比る秋も　あらわもわうちの邑よ
松風つるまさハ荻乃音それ
来とてや　思ひ出るゝ　時る
みやまハ常よりうすもの

御法ゑ宝て　碑ありて
神きすしさ水とれあめ
船やして　夕れ風ハ南まん
けさそられなる　松花の名
あら紫杉くはうるゝ露そ
あしゝのあおやいふとはしん
ゆるみれ明なう縁うる小田原
行のはえれりしまするゝ道

山かせは吹あとみゆる雪まて
林のしられはそよきは山嶺
松杉やおほ宮の残かゐん
月はひかりと神さひよろつ
人つきふ参の庭は鶯宮殿は
ころしもねよ袖のむきおわ
物縁いか弁ひろしめしたて
神ふみつきをていもは縁花ね

時節しもうらやんのすゝみん
なるかさむきわさ花の咲ける
遠山はかすみは僕の雪ならて
聖いうくひもの心あはの声
みる出とあらてや変は花ぬるゝ
おりうけのこすも枕の月
頭をへ一村落ちるひまも
雪のまうきの鶯のさひしさ

花の文字もとつる言葉なくて
秋なんぞやる日和暮し此節
待人もあるきけしきの戸此夜さ
うき柳かりと柳のふ世の中
あゝねぬ名も口すさひよりの月見初て
こゝろに松ところさかりるき
三草柳かるやつゝきは中なるらん
おともむくの事わきは無語

御さよぶりてきけることは此宿
雁やまかす声いおこかれてり
こゝろは菓子は名まで鳥れろもなく
みすむ鶴白の此とゝろなりけ
さけを地に花のゝきめは世をしれ
つくみく書此妻乃しれ本
花をそゝわるゝるゝきらみ寺此門
をしへはこそい人のあつまり

月よるの衣残すもかし　藤弁
毎こ咲きても方く〳〵年に有る
三ウ
強かりき山の秋風吹袷く
のこれハ錦よ京よ此葉の庭
待ーいるや板乃此行の夕附日
あハさい絶ん心もあり
例なくぬ身の払きかしの経をへて
うかれつる旅のかへ坂左

麻衣いと後よるのほとし
草ふくきの亦をし亦をし
と郭まく此月よ貴人度けりね
くれて花のあみさらいかぬ
前後のみつてもつもり経る
あちともかつうさ此小車
星ちくくよと此川弁よる浪よ
そこにみ吟その青よ後よへる

名オ

日乃くせ杖の表明る風邑く
受付けり露ちの山の端
春雨や花のよはひを惜しん
稚うしほく此家かすむころ
二月乃ころれは花咲雛ひな
いくつの石比入れ乃絲
行さいと秋き初瀬の宿とひて
ところあらしの雪よふるえ

椎のをいまり紛ゑ木のこつとな
夕日くろひんめとは山のきを
月やお残に客よむりてきれん
つゝまるゝ妹のうしろ舟
浪花の辺りの石比ぬを千深
はこくうきれの柱との一むら

名ウ

魚はうす布や雨る取待ちれん
しめく聖ろ野への入日すくなし

隠者のすむ尾上の雲は風落て
みねに流沐しぬるにや而
聞されても猶てさ落き雅の庵
ちるみの衣乃うきりあるを
あき出ふる瀬は来よ月よをひ
いまよみよ比残ぬるとの葉

3年11月

四八百五八

浦田八百主人